

【報告】

チャールズ・ディケンズ作品の語りに関する数量的調査

小野寺 進

はじめに

チャールズ・ディケンズは、その多才ぶりから「比類なき」(inimitable)と称されるイギリスを代表する小説家である。彼は小説家であると同時に、役者であり、脚本家であり、朗読者でもあった。物語に登場する人物がその個性を発揮し、縦横無尽に活躍し、物語を生き生きとしたものにするのは、ディケンズの得意とするところである。物語作者は、登場人物が会話をする場面では役者として、また物語の成り行きや情景、そして考えや哲学などを提示する場面ではストーリー・テラーとしての役割を演じる。ディケンズが晩年、公開朗読において、心身をすり減らし、取り憑かれたように演じるのは登場人物と語り手の役割を同時に行うところにあった。しかし、それ以上に登場人物たちを動かし、物語を制御し、複雑なプロットをまとめ上げ、読者を結末へと導くのが語り手の仕事である。今回の調査に至ったのは、ディケンズがストーリー・テラーとして物語にどれくらいの割合で関与しているのかという素朴な疑問によるものである。

ディケンズの長編小説を語り手の言説の数量的観点から調査する試みはこれまでなかったのは不思議なくらいである。小説で頻繁に使用する単語や句などが対象としたコーパス研究はこれまで行われたことはあった。今回の調査のように、語り手の言説の語数や割合を調べたとしても、小説の語りに関して何かしら統計的エビデンスが得られないかもしれない。しかし、これまでこうした数量的調査がこれまで実施されなかったことを鑑みるならば、少なくともディケンズの語りに関する統計的貢献ができると考える。更に言えば、ディケンズの語り手の言説の数量的調査による結果を軸として、他の作家の作品を同じように数量的調査による比較検討することで、これまで見えなかった語り手の作品に対する位置付けの重要性が明らかになるかもしれない。

調査の方法

【調査に使用したデジタルテキスト】

現在、チャールズ・ディケンズの作品は、すでに著作権が切れているため、デジタルテキストとして様々なところから提供されている。デジタルテキストを利用することで、使用されている語数を調べることは容易になり、また不必要な文章などを削除するといった加工ができるのが利点である。今回、最も手軽に利用できる、著作権フリーの作品を提供しているプロジェクト・グーテンベ

ルックのデジタルテキストを使用した。このテキストの使用に際しては、商用目的にすることは禁じられており、またその出所を明示する必要がある。実際に調査したディケンズの長編小説は以下の13作品である。

- ・ *Oliver Twist* (1837–39)
- ・ *Nicholas Nickleby* (1838–39)
- ・ *The Old Curiosity Shop* (1840–41)
- ・ *Barnaby Rudge* (1841)
- ・ *Martin Chuzzlewit* (1843–44)
- ・ *Dombey and Son* (1846–48)
- ・ *David Copperfield* (1849–50)
- ・ *Bleak House* (1852–53)
- ・ *Hard Times* (1854)
- ・ *Little Dorrit* (1855–57)
- ・ *A Tale of Two Cities* (1859)
- ・ *Great Expectations* (1860–61)
- ・ *Our Mutual Friend* (1864–65)

【方法】

調査するに当たり、デジタル化されたディケンズのそれぞれの長編小説テキストを以下の手順で、語り手の言説テキストにし、その語数を計算した。語数を測定するためにマイクロソフトのワードを使用した。

1. プロジェクト・グーテンベルグで公開されているディケンズのそれぞれの長編小説テキストを、ワードに変換し、チャプターや章の見出しなどを削除し、物語内容テキストだけにし、語数を計算する。
2. 1.でワードに置換された物語内容テキストから、登場人物の会話(直接言説で提示された箇所、例えば ‘… said, ‘ ’; ‘ ’… replied, sitting on the bench.’ などように、直接発話した言葉に付随する所作なども含む)を削除する。削除するにあたっては、ジュネットが彼の物語理論で示した、「物語内容の時間と物語言説の時間の関係」及び「言説の提示法」に準拠した。
・ 物語内容を提示する時間と物語言説時間の量を対比するのに、ジュネットは以下の4つに分類している¹。

pause: $NT = n, ST = 0$. Thus: $NT \infty > ST$

scent: $NT = ST$

summary: $NT < ST$

ellipsis: $NT = 0, ST = n$. Thus: $NT < \infty ST$

ここで物語の語り手の言説が関与するのがpauseとsummaryで、登場人物の対話を排除した時間になる。ここでは時間的にpauseとsummaryを採用した。

・発話の提示に関して「物語られた」(narrated)、「転記された」(transported)、「模倣」(mimetic)の3つにジュネットは分類している(Genette, 171-172)。「物語られた」発話は語り手の関与する度合いが最も大きいもので、「転記された」発話は語り手が登場人物の思考や感情などを代理で提示する方法で、「模倣」的発話は直接言説というスタイルで登場人物の発話を再現したものとなる。ここで語り手の言説を特定するのに、「物語られた」(narrated)あるいは「転記された」(transferred)言説だけを使用し、「模倣」(mimetic)的発話は排除した。

調査結果

作品ごとの総ワード数及び語り手の語りのみによるワード数を調査し、以下の結果となった。

<表>

Works	Types of narrative	Total words	Words of narrator's discourse	Percentage
<i>Oliver Twist</i>	heterodiegesis*	157,032w	86,870w	55.32%
<i>Nicholas Nickleby</i>	heterodiegesis	321,287w	159,238w	49.56%
<i>The Old Curiosity Shop</i>	heterodiegesis	222,860w	141,858w	63.65%
<i>Barnaby Rudge</i>	heterodiegesis	254,112w	149,861w	58.97%
<i>Martin Chuzzlewit</i>	heterodiegesis	344,416w	186,449w	54.13%
<i>Dombey and Son</i>	heterodiegesis	355,907w	213,150w	59.81%
<i>David Copperfield</i>	homodiegesis**	355,884w	220,560w	61.98%
<i>Bleak House***</i>	hetero+homodiegesis	354,392w	194,116w	54.77%
<i>Hard Times</i>	heterodiegesis	103,297w	51,399w	49.69%
<i>Little Dorrit</i>	heterodiegesis	338,165w	190,212w	56.25%
<i>A Tale of Two Cities</i>	heterodiegesis	136,120w	81,780w	59.98%
<i>Great Expectations</i>	homodiegesis	185,296w	122,435w	66.08%
<i>Our Mutual Friend</i>	heterodiegesis	325,939w	150,600w	46.20%

*heterodiegesis 異質物語 (語り手が物語世界外に存在する物語で、三人称で語られる物語)

**homodiegesis 等質物語 (語り手が物語世界内に存在する物語で、登場人物の一人が語る一人称の物語)

****Bleak House* は異質物語と等質物語が交互に語られる物語で、三人称の語り手が語るディスコースは 87,336 語 (53.60%) で、一人称のエスター (Esther) が語るディスコースは 106,780 語 (55.82%) であった。

※ *Old Curiosity Shop* の場合、語り手は三人称で物語るが、語り手はその後出版されるハンフリー親方 (Master Humphry) で、作中で主人公少女 Nell と遭遇していることを考えれば、形式的には三人称であるが、実質的には一人称の物語と読むことも可能となる。

考察

上記の結果から以下の3点が読み取れる。

1. ディケンズの長編小説に占める語り手のディスコースの割合が46%~66%と20%ほど開きが

あり、語り手の物語への関わり合いが必ずしも一定していない。同じ三人称で語られる異質物語でも *Our Mutual Friend* の46.20%に対して、*A Tale of Two Cities* では59.98%と約14%割合が異なる。これは物語プロットの複雑性や、展開される時空間などが影響していると考えられる。*A Tale of Two Cities* と同じく歴史小説である *Barnaby Rudge* は58.97%と、ほぼ同じ語りの割合となっている。

2. 物語の内容や語り手が一人称と三人称の場合では語りの割合が異なる。*David Copperfield* や *Great Expectations* の等質物語は語りの割合が60%を超えている。また、等質物語ではないが、語り手がハンフリー親方と特定できる *Old Curiosity Shop* も等質物語の一人称の語りに含めると、語りの割合が63.65%と同等のものであると言えるだろう。これはディケンズが自分自身を登場人物に置き換えることで感情移入が容易になり、語り口が流暢になっているとも考えられる。
3. 同じ等質物語で一人称の語りの場合であっても、性別の違いで割合が異なるということである。ディケンズの場合、一人称で語る等質物語である *David Copperfield* や *Great Expectations* の語り手が男性であるのに対し、*Bleak House* ではエスターは女性であるため、自分自身をエスター置き換えることが難しかったのかもしれない。

おわりに

今回の調査をさらに深く掘り下げるには、ディケンズの他の中編小説や短編小説なども調査範囲に含める必要があることと、語り手が物語る現在の位置からの言説を抽出し、それが全体と比較してどれくらいの割合になるかを調べる必要がある。

今後、同様の調査をヴィクトリア朝文学全体まで広げることで、一般的にヴィクトリア朝の小説の語りがどのように数値化できるか、またディケンズの小説がヴィクトリア朝文学で占める語りの位置付けができるかもしれない。

注

¹ Genette, 95. *NT*とは物語言説時間のことで、*ST*とは物語内容時間のことである。(1)は「休止法」と言われ、物語テキストのある部分、あるいは物語言説の時間が、物語内容の時間のいかなる経過にも対応せずに物語時間が止まっている状態である。この休止法は、描写や語り手の解説的な介入によって引き起こされる。(2)は「描写法」と言われ、登場人物の対話など、物語言説の時間と物語内容の時間の等価性がある場合を指す。(3)は「要約法」と言われ、物語言説の時間が物語内容の時間よりも短い場合を指す。(4)は「省略法」と言われ、一定の時間を要したはずの状況・事象に対応する部分が物語言説にない場合を指す。

参考文献

Genette, Gérard. *Narrative Discourse: An Essay in Method*. Trans. by Jane F. Lewin. Cornell University Press, 1980.

Project Gutenberg < <https://www.gutenberg.org/> >